

1960年前後、激動する時代を背景にアンフォルメル絵画とオブジェを武器として
「芸術」と「東京」に総攻撃をかけた驚異の前衛美術集団



一九六〇年前後、日本を席卷したアンフォルメル絵画に刺激を受けて、読売アンデパンダン展を中心にして一連の「反芸術」と呼ばれる動きが美術界に起こりました。一九五七年に結成された「九州派」は、東京の「ネオ・ダダ」とともにこの「反芸術」の動きを代表するものであるとともに、当時日本の各地から勃興した「地方」に根ざす前衛的芸術運動であるという意味でも、現代美術史上特異な意義をもつグループです。

本展は、このグループが試みたアスファルトを用いたアンフォルメル絵画、オブジェ、ハプニングなどの作品の展開を、約九〇点の現存作品のほか、現存しない作品の写真パネルおよび関連資料によって明らかにするものです。それによってこれまでは作品そのものがあまり重要ではないアナーキーなエネルギーの集合体と考えられていたこのグループの実像を初めて明らかに九州派が戦後日本史の転換期に現われたことの意義や、そしてポップ・アートなどの欧米の動向とは異なる「生活者の視点」を正当に評価し、また一九六八年を最後の展覧会としてなぜ解体しなければならなかったかを考えようとするものです。

熱気と混乱に満ちた九州派の軌跡は、今もなを、「前衛」とは、「地方」とは、そして「近代」とは何かという問いを発し続けているのです。